

# ツーリズム・デスティネーションの社会学

## —モダンツーリズムとポストモダンツーリズム—

根橋 正一

### はじめに

社会学がツーリズム研究にかかわるとき、どのような問題を設定するか、その研究範囲はどう設定されるのか、どのような研究が構想されるべきかといった諸問題は検討に値する。旅、旅行、ツアーという人びとの行動は、いつの時代どこの地域にもあったことであろうが、社会学の対象としての範囲の絞込み、限定は必要になる。社会学はその生誕以来近代、近代社会、ゆえに近代資本主義社会を研究対象としてきたが、その前例に従うとすれば、近代社会におけるツーリズム、ツアーがわれわれの対象範囲に入ってくることになる。言い換えれば、古代や中世の旅ではなく近代の旅行が対象であり、近代の旅行との関係で古代や中世の旅が俎上に上がることがあるのは当然であるが、いつのころのどのような旅をわれわれは対象とするのか、具体的に構想することになる。

ツーリズムの誕生の時期を19世紀中葉とする研究が多いなかで、吉見俊哉は、18世紀以前からの旅行、グランドツアーなどが近代的なツーリズムの準備段階としてあったと論じている。

観光について考えることの照準は、たんなる旅行の形態の変化というよりも、近代における民衆の身体感覚や娯楽の構造的な変容にあるものである。そう考えると、このような変容が起り始めるのは、必ずしも19世紀においてではなかったと考えられる。たとえば、17、18世紀に全盛を誇ったグランドツアーにあっても、異郷の風景を観察し、書きとめることに重心を置いた旅になっていった。

18世紀になるとツアーの視覚的な側面が重視されていくようになり、また風景をどのように見たらいいのかが決まってきて、そのためのガイドブックも整理され始める。これに加えて、近代におけるロマン派や風景画、ピクチュアレスクと観光との関係も考察に価する<sup>1)</sup>。

近代ツアーの誕生に先立ってあったグランドツアーにおいて、すでに近代的な身体感覚や娯楽の構造的な変容が始まっているというのであり、ここからツーリズム研究の範囲にあるということである。

近・現代世界という視点からみると、世界は単一の経済システム、すなわち世界資本主義健全システムに覆われ、他方では200にも及ぶ国民国家に区分された人口70億人に達する惑星上の世界であるということが出来る。ツーリズムはこの世界を人びとが移動する行動であり、この地球世界の構造の源となったヨーロッパ世界経済が形成された16世紀以来の旅の行動が、われわれの研究の対象となるであろう。17世紀にはじまるグランドツアーはそうした位置づけをもつからである。

そんななかで、社会学はツーリズムに関してどのような研究がなされるのであろうか。近・現代世界理解に資するような、ツーリズムの主体に関するツーリストに関する研究、世界の構造にかかわる空間的な認識を基にしたデスティネーション研究も重要な課題であると考えられる。しかし、これまでのツーリズム研究においてデスティネーション研究は必ずしも豊かな成果を産み出してきたとはいえない。本稿では、デスティネーション研究の背景について論じることとする。1章ではモダンツーリズムとデスティネーションについて、2章ではポストモダンツーリズムにかかわる研究について述べる。

## 1章 モダンツーリズム—植民地ツーリズムと大衆ツーリズム—

グランドツアーに始まるモダンツーリズム研究におけるデスティネーションへの言及の欠如の背景にあるのは、19世紀後期から20世紀前期の社会学理論における「空間論」の欠如と関連しているのではないか。この章では空間論の動向に注目して論をすすめる。

### 1. 空間論の衰退とデスティネーション研究

ツーリズムにおけるデスティネーション研究は、西欧における空間論の形成と展開のなかで、その方向性が規定されてきた。ここでは地理学のハーヴェーやソ ज्याの論考を導きとして、ルネサンス以来の空間論の形成と盛衰の歴史を整理することにしよう。

#### (1) 空間論の形成と発展

西洋世界における空間と時間についての考え方の根本的変化は、ルネサンスにおいて生じた。西洋中心的観点からすれば、大航海を経てヨーロッパ人が見出したのは、地球は有限であり、理解可能なものであることであった。それが、しだいに利潤に強い関心

---

1) 吉見俊哉「観光の誕生—疑似イベント論を越えて」山下晋二編著『観光人類学』新曜社、1996年、22-33ページ

が示されるようになる社会において、地理学に関する知識は貴重な商品となった。なぜなら、富、権力、資本の蓄積が空間についての個人化された知識ないし空間の個人的支配と結び付けられることになったからである。さらに、交易、領地に係る競争、軍事的行動、新たな商品の流入、金の流入などによって、それぞれの場所は、より広い世界の直接的な影響にさらされることになった<sup>2)</sup>。例えば、遠近法という近代的な認識に注目してみよう。

### 遠近法

15世紀なかばフィレンツェで、遠近法の基本的規則が作りあげられた。遠近法を用いた地図と絵画の固定化された視点は、「冷たい幾何学的」で「体系的な」空間の感覚をつくりだすとともに、「自然の法則と調和しているという感覚」をもつくり出していった。遠近法は、個人の「目」から世界を把握するものである。それは光学を重視するとともに、神話や宗教によって定められた真理に対して、見たものを「真なるものとして」表象することのできる個人の能力を重視するものである。個人主義と遠近法主義との結びつきは重要である<sup>3)</sup>。

デカルトの合理性の原理にとって有力な物質的根拠を提供した。それは、芸術的、建築的諸実践が職人とヴァナキュラーな伝統から断絶し、知的活動、創造的な個人としての芸術家、科学者あるいは企業家の「アウラ」へと変化していったことを示していた。さらに、遠近法の諸規則の形成は、商業、銀行業、簿記、貿易、集中化された土地管理における農産物生産、といった諸実践の合理化と結びついていった<sup>4)</sup>。

空間的発見と認識、空間論の発展は、ヨーロッパにおける近代性の中核部分をなす役割を演じていたのである。しかし、19世紀後期の帝国主義的資本主義の時期においては空間論が後退していくことになった。

### (2) 空間論の後退

では何故、どのように、いかなる事情によって空間の視点は社会理論、ツーリズム研究から排除されるにいたったのか。また時間／歴史軸にもとづく研究が主流を占めることになったのはいかなる事情があったのか。1880年頃から第一次世界大戦が始まる時期に科学技術と文化に根本的な変化が起こったからである。

19世紀、社会諸科学およびマルクス主義社会科学の興隆の時期、空間に対して歴史的、

---

2) Harvey, David, 1990, *The Condition of Postmodernity*, Blackwell Publishers = 吉原直樹監訳『ポストモダニティの条件』1999年、青木書店、311ページ

3) 同上書、313-314ページ

4) 同上書、314ページ

時間的論点が優位を占めるようになった背景には、資本主義の興隆とそれに続く危機の到来、さらにそれらに対応するための認識論の変動が発生したからであった。ここではソジャ『ポストモダン地理学』<sup>5)</sup> 第1章に沿って整理する。

この時期、死を予言されていた産業資本主義は、ラディカルな社会的、空間的な再構築によって、死を免れるばかりでなく延命した。その再構築とは、特徴ある生産関係と分業の内包的強化および帝国主義的グローバル拡大のような外延拡大とによる世界の劇的な変化を内容としていた<sup>6)</sup>。近代化とモダニティは、危機の激化と再編の条件のもとで相互に作用し、資本主義の延命と結びついていた。資本主義は弱体化し、危機へ向かう内発的な傾向を持ちながらも、その根本的な生産の社会的諸関係とその特徴的な分業を再生産する能力をもっていたのであり、近代化は資本主義のこの延命能力と明確な結びつきをもっていたのである<sup>7)</sup>。近代化とは具体的な形態をもった空間—時間—存在という重要な再生産を生産するために周期的に加速される社会再編の連続的な過程であり、主として生産様式の歴史的・地理的な動力学から生じるモダニティの本質と経験の変化である。

1830年と1848年から1851年は、最初の長期にわたる「グローバルな」危機と再編の時期であった。続く1851～1870年の20年間は、工業生産、都市成長、そして国際貿易における資本主義の爆発的な拡張の時代、資本蓄積と社会的調整体制の隆盛した時代であった。しかし、19世紀最後の30年間に、当時の先進資本主義諸国のほとんどで〈長期的な不況〉と呼ばれる破産状態に転じ、再編と近代化の必要性が力説された。ジェットコースターのように周期的に起こる危機にともなう再編は、拡張して好景気へ、そしてふたたび危機と再編へと導き、一つの蓄積体制から別の蓄積体制への移行を指導することになった<sup>8)</sup>。こうした変動が20世紀の前半までを特徴づけていた。

では、この時期に空間論の欠如はいかなる理由でどのように派生したか？

この19世紀末から20世紀前半にかけての転換の時期に、批判的社会理論の領野を規定する二つの「近代運動」すなわち、マルクス主義の伝統を中心にもつものにより自然主義的で実証主義的な社会科学を中心とするものが現れた。レーニン主義的なマルクス主義は転換期を通じて最も成功した近代運動であり、前衛的な史的唯物論／科学的社会主義の再編であった。他方、社会諸科学は、社会の分析や理論家に対して道具的で、ま

5) Soja, Edward W., 1989, *Postmodern Geographies: the Reassertion of Space in Critical Social Theory*, =加藤政洋・西部均・水内俊雄・長尾謙吉・大城直樹訳『ポストモダン地理学—批判的社会理論における空間の位相—』青土社, 2003年, 第1章

6) 同上書, 36ページ

7) 同上書, 37ページ

8) 同上書, 38-39ページ

すまず実証的になる自然科学の手法の適用にもとづく内的な分割を進行させ、次第に正当性とヘゲモニーを握る中核的な潮流と学問的な厳密化と断片化ならびに科学万能主義批判とのあいだで展開した<sup>9)</sup>。

批判的社会諸科学と西欧マルクス主義は二つの特徴を共有していた。すなわち、あらゆる外からの制約を打破する人間の意識と社会の意思がもつ力に関心をもち、解法を目指したこと、および「歴史の形成」すなわち説明と解釈、対峙と批判の歴史的様式に、この社会的な力と潜在的に革命的な主体性を批判的に刻み込んだことであった。この両極にある社会理論はどちらも、活気ある歴史的想像力で染めあげられていた。その上、この歴史的想像力を賛美するモダニズムは、地理学的想像力を潜沈、霧散させ、社会思想や言説における時間による空間の実質上の絶滅を引き起こしたのである。地理的分析や説明は、現実の社会的行為者が歴史の形成に巻き込まれる場となる舞台を記述するだけの役割りに引き下げられたのである。史的唯物論と社会諸科学により支配されるようになり、社会生活を形成する空間性が批判的な洞察の雛形として留意されることがなくなったのである<sup>10)</sup>。

世紀末のマルクス主義はかたくななまでに歴史主義のなかにとどまり続けた。地理的な不平等発展の背後にある原動力は、本質的に歴史的であったのであり、つまり社会諸階級の足かせを取り除く闘争に通じた歴史の形成だったのである。資本主義そのものと同様に、資本主義の近代的批判もまた時間による空間の絶滅を通じて推進されたのだった<sup>11)</sup>。

他方、批判的社会科学における近代化は、類似した歴史的リアリズムをもって合理化してゆくものとして概念化され、資本主義の起源や〈産業革命〉とともに始まり、19世紀の厄介な移行を経て進行した。「伝統」から「モダニティ」へ、「ゲマインシャフト」から「ゲゼルシャフト」へ、機械的連帯から有機的連帯へ、など決定的で絶対的な道筋としてその特徴を定義した。マルクス主義が、金融資本の国際化による帝国主義の勃興とみなし、他方批判的社会科学者たちが世界のなかで未発表の伝統的で、いまだ近代化されていない部分に対する時間差のある発展の拡散として解釈した。これは、あらゆる場所の近代化をヨーロッパ産業資本主義の歴史のダイナミックスに帰着させてしまうヨーロッパ中心の見方であった。ここにおいて、マルクス主義による歴史の理論化が一つの批判的照準をもち続けたのに対し、社会科学はその批判的歴史主義をM. ウェーバーの方法論的個人主義、E. デュルケムの集合意識の社会学、G. ジンメルの新カント主義懐疑論、E. フッサールの志向的現象学のような多種多様なバージョンで表現した。これらのアプローチは、人文地理学や社会の地理的不均等発展にいくらか注意を払って

9) 同上書, 41-42ページ

10) 同上書, 42-43ページ

11) 同上書, 44ページ

はいたが、本質的にモダニティの地理は社会の近代化に付属するものであり、それを反映する鏡のままであった、とソジャは批判的である<sup>12)</sup>。

ソジャが明らかにした19世紀末から20世紀前半における空間論排除についてハーヴェーは「時間と空間の圧縮」と呼ばれる事態から説明している。すなわち、『ポストモダニズムの条件』で彼は、19世紀における資本主義の興隆と危機からの回復といった過程において、空間的拡大がその原動力となったと論じている。その上で、「時間空間の圧縮」が空間論後退へ繋がったと論ずる。

ハーヴェーは、マルクス、ヴェーバー、アダム・スミス、マーシャルらの社会理論はその理論的構成において、空間にたいして時間の特権視しているという。すなわち、何らかの既存の空間的秩序が存在し、そのなかで時間的過程が進行するということか、あるいは空間を人間的行為の根本的な側面ではなく、取るに足らない偶然的なもののみなしうるほど空間的障壁が著しく低減していることを前提にしているのである。他方、美学理論は「時間の空間化」に強い関心を持っている<sup>13)</sup>。

社会理論はこれまで常に社会変動、近代化、変革（技術的、社会的、政治的変革）の過程に焦点を合わせ、進歩がその理論的对象であり、歴史的時間がその最も重要な次元であった。しかし、進歩は空間の征服、すべての空間的障壁の打破と根本的「時間による空間の絶滅の追求」ともなったものである。つまり、空間を偶発的なカテゴリーにしてしまうことは、進歩の概念自体に含意されているのである<sup>14)</sup>。

この時期における空間論なき社会理論の状況についてアーリは、『社会を超える社会学』1章で次のように述べている。

18・19世紀、北大西洋環帯、つまり西欧および北米所社会に生じた産業資本主義の自然に対する克服という革命的な実践を射程に入れた学問として、社会学は誕生した。社会と衝突する自然は、自由もなく、敵対する領域に格下げされ、人間による支配とコントロールの対象として位置づけられることになり、自然を克服することが近代社会の成功とみなされることになった。こうしたなかで生まれた社会学は、伝統—近代の二分法に市場を見出すことになった。それゆえ、当初論じられた社会発展に関する諸理論は二分法的で明確な発展方向を指し示すものであった<sup>15)</sup>。

12) 同上書、45-46ページ

13) Harvey, David, 1990, *The Condition of Postmodernity*, Blackwell Publishers = 吉原直樹監訳『ポストモダニティの条件』1999年、青木書店、263ページ

14) 同上書、264ページ

15) John Urry, 2000, *Sociology Beyond Societies: Mobilities for the twenty-first Century*, Routledge, = 吉原直樹監訳『社会を超える社会学—移動・環境・シチズンシップ』法政大学出版社、2006年、16-19ページ

例えば、封建制から資本主義へ、ゲマインシャフトからゲゼルシャフトへ、軍事型社会から産業型社会へ、機械的連帯から有機的連帯へとといった二分法の諸理論が空間論に注目することはなかった。

### (3) 空間論の再生

20世紀中頃以降社会理論において空間の重要性が認識し、空間論の再生へ路を開いたのは、フーコーやプーランザス以来のマルクス主義者たちであった。

#### プーランザス

ソジャが、空間に着目したマルクス主義者として評価しているプーランザスは、フーコーの一連の研究との対話を行い、独自の空間論である空間的母胎（マトリクス）論を展開した。プーランザスは、不均等発展を資本主義の当初からの特徴であり、民族=国家を拠点としている傾向があるとして、国家と民族の関係を基礎付けられていると論じた。歴史的時間と差異化された別個の空間との不均等性として資本主義の不均等が生ずるのであり、差違こそが資本主義的發展の前提である<sup>16)</sup>、とした。

#### 空間的母胎

資本主義の空間的母胎は、資本主義的な生産関係および社会的分業関係の問題である。大工場では、直接生産者や労働者は生産手段から分離されており、このことが社会的分業の基礎をなしている。こうした工場は、流れ作業、ベルトコンベアー式の分業に基づいており、系列的、非連続的、断片的、細胞上の非可逆的な空間を前提としている。プーランザスは、この前提となっている空間の原理を資本主義的な「空間的母胎（マトリクス）」と呼んでいる。

資本主義の諸々の空間のなかで、人びとは諸々の境界を横切って移動し、それぞれの場所は他の場所とのズレによって規定されている。それらの空間は空間的母胎の物質化されたものであり、同様に近代的な意味での「国境」もまたその一部として形成される。すなわち、内側と外側とを設定する系列的かつ不連続なつながりの上を移動できる国境が出現したのである。さらに、近代的な意味での帝国主義は、このように決定された境界と不可分である。そして、国家領土は、土地の自然的特徴とはなんら関係を持っていないのである<sup>17)</sup>。

近代国家の諸装置、すなわち軍隊、学校、集権化された官僚制、監獄は、資本主義の

16) Poulantzas, N., 1978, *State, Power, Socialism*, Presses Universitaires de France, =田中正人・柳井隆訳『国家・権力・社会主義』ユニテ, 1984年, 105-106ページ

17) 同上書, 113ページ

空間的母胎を物質化したものである。領土内の人びとは、土地から解き放たれはするが、その結果は工場のなかに分割配置されるのであり、家庭、学校、軍隊、監獄、都市、そして国家領土のなかに分割配置されるに過ぎない<sup>18)</sup>。

### 前資本主義的空間的母胎

前資本主義的、すなわち古代的、中世的な政治権力および国家は、近代資本主義的な国民国家とはまったく異なる空間的母胎を前提としている。前資本主義的な空間が、連続的、等質的、対称的、可逆的かつ開放的であるのに対して、資本主義的な空間は、非連続的、差異的、位階制的、非対称的、非可逆的、閉鎖的である<sup>19)</sup>。

古代の空間、例えば古代ギリシアではポリスやアゴラ（ポリスの中心）というように中心を持ってはいたが、国境を持ってはいなかった。これは、求心的な空間ではあるが、外部を持たないという意味で開かれた空間であることを示している。そして、中心はひとつの空間のうちに組み込まれているが、その空間の特徴は等質性および対称性であり、人々はそのなかを移動するのではなく循環するのであって、人は常に同じ場所へ赴くのである。古代ギリシアも古代ローマもともに、植民地建設をおこなったが、それはアテネあるいはローマの模写、コピーを設けるためでしかなかった。支配や搾取などのような非対称的な関係を目指すものではなかったのである。

中世都市の城壁は、境界を限定し、農村の封建的絆は直接労働者を土地に固定していた。中世の国家、領土は、封建制の生産諸関係および単純な分業と結びつつ、ほとんど変化しない空間的母胎の上に描かれた輪郭である。それはやはり等質的、連続的、可逆的かつ開放的な空間であった。中世の社会は、大量の人びとが移動する世界であった。個人的な形であれ、集団的な形であれ農民の移動は中世社会の大きな現象の一つであったし、騎士・農民・商人・教団の認可を受けて旅する聖職者や僧院から断絶して旅する在俗聖職者・学生・あらゆる種類の巡礼者・十字軍の兵士などが、旅の途上にあるような大放浪の時代であったのである。諸都市や封建的所領や領地は開かれており、一連の聖地を經由して、エルサレムというあのへり、すなわち中心地のほうを向いていた。封建的構成体を支配していた宗教は、空間にキリスト教世界の刻印を押すことによって、宗教を媒介とした空間を形成していたのである。この空間もまた、連続的かつ等質的な空間的母胎であり、人びとはこのなかを移動するのではなく循環していた。所領、村落、都市、エルサレムおよびその世俗的化身などの間には、また墮落と救済の間には、断絶・亀裂・隔たりは存在しない。境界および城壁・森・砂漠といった場所と場所を隔てる中間的場所は、ある部分から他の部分への移動のために横切らねばならぬ亀裂ではな

18) 同上書、113-114ページ

19) 同上書、108-109ページ

く、同一の道筋の交流点なのである<sup>20)</sup>。

以上のような前資本主義的な空間とは異なる資本主義社会の空間的母胎は、近代国家を構成する領土の役割にかかわってきた。近代資本主義社会では、直接生産者、労働者は生産手段から分離されているが、このことが機械的、大工業における社会的分業の基礎となっている。流れ作業というテーラー主義的分業を特徴とする工場、工業は古代的、封建的な空間的母胎とは別種の資本主義的空間的母胎を含んでいる。それは、系列的で、非連続的、断片的かつ細胞状の非可逆的な空間を前提としているのである。そして、この空間は隔たり、裂け目、囲い、境界からなっているが、この空間が果てることはない。すなわち、資本主義的な労働過程は、世界的な規模に拡大する傾向を持っており、囲いや境界を越えて広がっていくのである<sup>21)</sup>。

このことはまた、同じ資本主義的空間的母胎に規定された近代的な意味での国境の出現をも促す。国境とは、内側と外側の境界を設定して、系列的ではあるが、非連続なつながりを画すものである。資本主義の不均等発展は、空間的次元においては、不連続な形態をとることになり、国境によって区切られた近代国民国家の領土は、資本主義的空間的母胎によって刻み込まれたのである<sup>22)</sup>。近代資本主義世界を空間的に認識する視点が提示されたといえる。

#### フーコーの空間論とプーランザス

プーランザスは、「フーコーの分析は、時としてマルクス主義の分析と一致しているだけでなく、多くの点でマルクス主義の分析をより豊かにしている」と評価しているが、それには2点の留意すべき条件をつけている。すなわち、「第1の条件は、近代における権力の制度的種別を基礎づけている〈経済的なもの〉を正確に理解すること」、 「第2の条件は、国家と生産関係、そして社会分業との関係を、時間的・空間的母胎という本質的な面からも把握すること」が必要であるとしている<sup>23)</sup>。ここに示されたプーランザスの立場は、マルクス主義的な経済決定論であり、フーコーの立場とは対照的であるが、フーコーが発見した近代的な空間に関する諸点が重要な視点であることを理解し、それを独自の空間論、特に「空間的母胎」論で説明したのである。

労働者は、それぞれ生産関係の一部、分業の一部を担っていて、労働過程でそれぞれ実践するなかで、労働者自身をアトム化、細分化する鋳型として機能するのが、基本

20) 同上書、110-111ページ

21) 同上書、112ページ

22) 同上書、113ページ

23) 同上書、70-71ページ

的物質的枠組みである。この枠組みは、連続的・等質的であり、分割され細分化されている時間-空間の組織化のうちに存在している。この空間は、基盤割され、分割され、細胞上になっていて、そこでは断片（個人）は自分の場所を占めており、それぞれの場所が断片（個人）に照応しているが、同時に等質かつ一様なものとしてたち現れる。またこの時間は、直線的・系列的・反復的かつ累積的な時間であって、しかもその時間は完成品を目指している。つまり、この時間=空間の枠組みは、生産ラインの中に物質化されているのである<sup>24)</sup>。

この部分に着目してソジャは次のように論じている。

部分的にルフェーブルの研究に依拠することで、プーランザスは資本主義の空間的・時間的な「母胎（マトリックス）」、すなわち、資本主義の物質的基盤を生産の前提であると同時に、その具現化であると定義した。プーランザスが空間的・時間的な母体と分類した「領域」と「伝統」は論理的先験性であって、生産関係の前提として「同時に」出現する。空間的・時間的な母胎の創出と変革は、本源的な物質的枠組み、すなわち、社会生活の現実的基体を確立する<sup>25)</sup>。

ルフェーブルやフーコーに共鳴して再び空間に目覚めたニコス・プーランザスの考察は、生産諸関係の前提であると同時に、その具体化でもある国家と社会空間の「母胎（マトリックス）」に関する概念化である。

## 2. デスティネーション研究

### (1) ワールドシステムとツーリズム

マルクス主義的な空間論への注目は、アミンらの従属理論それに続くウォーラーステンのワールドシステム論に受け継がれ、展開していく。不均等発展論と空間論的マルクス主義理論の特徴をみていこう。

マンデルからプーランザス、従属理論、ワールドシステム論にいたる諸理論は、地域や国家の不均等発展資本による労働の直接的搾取と同時に資本主義にとって根本的であるという認識で一致していた。不均等発展にかかわる空間構造について理論を提出していた。すなわち、A. G. フランクは「メトロポリス（中枢）—サテライト（衛星）」、S. アミンは「中心（センター）—周辺（ペリフェリー）」、ウォーラーステンは「中心（コア）—半辺境（セミペリフェリー）—辺境（ペリフェリー）」といった具合だ。これら

24) 同上書, 71ページ

25) ソジャ, 前掲書, 156ページ

の議論はいずれもマンデルの議論を補完し、拡大するものであり、世界経済を空間的に認識するものであった。

これらの諸理論は、資本主義世界経済には、中心と周辺構造が存在している。すなわち、工業生産と蓄積の中心である「中心」国家と、第三世界の一部を形成している下位におかれた従属的で、ひどく搾取された「周辺」国家とが存在しているのである。搾取は主に国家間関係のレベルで操作される中心地域と周辺地域との地理的過程から生まれるものであると考えられていた<sup>26)</sup>。

地域や国家を分ける境界を横断して移動するツーリズムは、当然この世界経済の影響を受けるのである。境界を持ちつつ一連につながりあった世界経済を横断する人びとの流れの典型は、高収入を求めて辺境地域から中心国家へ移動する労働力移動およびその逆の流れ、すなわち中心地域から辺境地域へのツーリズムとである。

## (2) カプラン

カプランはその著『移動の問題 (Questions of Travel)』(1996年=2003年)で、欧米の文学批評や文化批評を扱ったカルチュラル・スタディーの文脈でモダンおよびポストモダンにおける移動の言説についての研究をおこなっている。その著作では次のように問題提起して空間論的な問題関心にもとづいて論を進めている。

本拠 (home) と外地 (away), 定位 (placement) と移動 (displacement), 定住 (dwelling) と旅 (travel), 居場所 (location) と居場所喪失 (dislocation) などという言葉が、現代のヨーロッパや合衆国における文学批評や文化批評でいかにして、またいつ頃から、ある役割を演じるようになったのか<sup>27)</sup>

彼女は本書の主張を「現代批評において旅や移動という言葉が目立ってきたことは、植民地にかかわる言説が生み出されてきた歴史と結び付けて理解されなければならない」と述べている。そして、研究の方法として、地理上の位置的な区別および歴史的にはモダンとポストモダンを区別することによって、文化的な表象の諸問題にたいする連続しつつも識別可能な二つの反応を明らかにすることができるとしている。「旅 (travel)」はおおいにモダンな概念であり、西欧の資本主義が拡張しつつあった時代の商業活動と余暇活動を意味しており、他方「移動 (displacement)」はモダニティがもたらした、もっと大勢の人間を巻き込んだ移住を思わせる。このたびと移動という二つ

26) 同上書, 144-145ページ

27) Kaplan, Caren "Questions of Travel: Postmodern Discourses of Displacement" Duke University Press, 1996 (=村山淳彦訳『移動の時代—旅からディアスポラへ』未来社, 2003) 20ページ

の概念によってモダンとポストモダンの間の連続性と不連続性が検討される<sup>28)</sup>。

そしてそのモダンおよびポストモダンの歴史については近代帝国主義の経験として次のように要約している。

近代帝国主義という歴史的現象はヨーロッパや合衆国の産業社会化を背景として展開され、経済的、文化的に併合されたさまざまな地域は「第三世界」に仕立てられたものの、やがて植民地独立運動に乗りだし、いわゆる第一世界は、脱産業社会化を図りながら変化や不安定化をもたらしている<sup>29)</sup>。

帝国主義植民地時代から植民地放棄と諸国の独立、モダンからポストモダンへという18・19・20世紀の欧米中心的な世界の動きを背景とした問題と主張を述べている。モダンの移動として亡命 (exile)、ツーリズム (tourism) を、ポストモダンの移動としてディアスポラ (diasporas) に対置して考察を進めている。

冒険・探検・ツーリズムを含む「旅 (travel)」はモダンな概念であり、西欧の資本主義が拡張しつつあった時代の商業活動と余暇活動の両方を意味している。モダンにおける亡命とツーリズムについてカプランの整理を示しておこう。

亡命とツーリズムとの文化表象における差異は、「高級」文化と「低俗」文化との分裂、芸術と商業主義との分裂という二項対立である<sup>30)</sup>。

亡命 (exile)	ツーリズム (tourism)
<ul style="list-style-type: none"> <li>・余儀なくされたもの</li> <li>・出身共同体からの疎遠にされた</li> <li>・文化的アイデンティティの物語のなかにおける役割を演じる</li> <li>・モダニズムの高級文化形成に加担</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・選択の行為として礼賛される</li> <li>・全地球規模の共同体を目指す</li> <li>・ポストモダニズムの先駆け = 消費文化と余暇、科学技術の産物</li> <li>・商業的で皮相、低俗文化</li> </ul>

出典：Caren Kaplan, 1996, *Questions of Travel: Postmodern Discourses of Displacement*, Duke University Press, p.27 = カレン・カプラン, 村山淳彦訳, 2003, 『移動の時代—旅からディアスポラへ—』未来社, 63-64ページより

### 帝国主義的ノスタルジア

亡命をめぐる欧米の表現にはノスタルジアがまつわりついている。過去、故郷、母語などいったん失われた後で懐かしいと思わせるノスタルジアである。これは「故郷」や「自然」から切り離されたときの思いを癒すためにここに戻るしかないというものであ

28) 同上書, 序説

29) 同上書, 2ページ

30) 同上書, 65ページ

る<sup>31)</sup>。ノスタルジアにはこのような通常のもの、「帝国主義的ノスタルジア」と呼ぶべきものがある。ある人間が誰かを殺しておきながら、その犠牲者への哀悼に沈んでいるとか、生活形態を意図的に改変しておきながら、変更以前のままでないことを惜しむとか、自ら環境を破壊しておきながら自然を尊ぶといった行動とは逆説的なノスタルジアである。欧米列強の帝国主義的の拡大による被征服者や滅亡させられた者たち、文化、民族は、勝利者によって賛美されるのである<sup>32)</sup>。

欧米の亡命者もツーリストも帝国主義ノスタルジアにとらわれて周辺をめざし、「自然」「失われた民族や文化」を求めて、ますます遠くへ移動せずにはおられなくなるのである。亡命者たちは価値ある創造的な洞察を得て、ツーリストは商業や余暇と結びついていて、亡命者たちも貿易上の使節としての機能を果たしていた。万年筆、シルクのストッキング、ポータブルタイプライターに対する外国の需要を高める手助けをした。亡命者たちが導いた後に続いて大挙して押し寄せるツーリストは定期航路船会社や旅行代理店の利益増大に貢献したのである<sup>33)</sup>。

ツーリストは失われた、あるいは被征服の地にあるはずの「真正性」の確かなしるしを捜し求める。それゆえに、ツーリストはモダニティに宿るヨーロッパ中心主義に立っており、経済的不均衡を構造としてもっている世界を旅する、すぐれて欧米的な存在であり、植民地時代の遺産から切り離すことができない。ツーリストは「ヨーロッパの世界を支配するという壮大な野望の挫折にささげられた記念物」を経巡り歩くことであり、経済的破綻から発生し「開発」された手ごろな訪問地を対象とすることになった<sup>34)</sup>。

帝国主義的ノスタルジアにもとづくツーリズムは、破壊した当人たちの、破壊した者、モノ、自然、すなわち被征服地（空間）への訪問を意味している。

### (3) デニッシュ・ナッシュ

ツーリズム研究において注目されたバーレン・スミス編著『観光・リゾート開発の人類学—ホスト&ゲスト論でみる地域文化の対応—』所収のデニッシュ・ナッシュの論文は注目される。「帝国主義の一形態としての観光活動」と題されたその論文は、第I部理論的展望の2本のうちの1本であり、この著書の理論的方向性を示すものでもある。

ナッシュは、ツーリズムを、ツーリストが発生するメトロポリスあるいは生産の中心と、デスティネーションおよびその地域の地元民との間の取引によって、成立し発展するものであるとしている。すなわち、メトロポリスに発生するゲストとデスティネーションの居住者であるホストとの関係である。ツーリズムはメトロポリスとデスティ

31) 同上書, 73ページ

32) 同上書, 75ページ

33) 同上書, 97-98ページ

34) 同上書, 117-118ページ

ネーションという空間の関係、それも両空間の帝国主義的な関係のなかで起こるのである。

メトロポリスとデスティネーションという空間的關係からツーリズムを記述するとすれば、ツーリズムは、ツーリストと彼らが居住するメトロポリスの持つ諸力とが、デスティネーションの地元民との取引である<sup>35)</sup>。ツーリズムの過程は、生産の中心あるいはメトロポリスにおいてその刺激が発生し、次にツーリストのニーズを満たすためにデスティネーションを選んだり、創出したりして、さらに生産の中心とデスティネーションとの間に取引がなされる。その取引は帝国主義的であって、メトロポリス—サテライト、センター—辺境・ペリフェリーといった空間的な構造をもっているというのである。すなわち、デスティネーションは、ツーリストの発生源となる地域よりもわずかに生活水準が低くあるはずだということである<sup>36)</sup>。生産の中心／メトロポリスに住む人々のニーズと経済力とに応じて、ツーリズムは広がっていく<sup>37)</sup>。

ツーリズムは、メトロポリス居住者のニーズによってデスティネーションは選定され、その地元民の協力で発展したものであり、メトロポリスの夢と一致したものであった。その運命は外因的な力でつながれ、その力は制御不能になった<sup>38)</sup>。

### 3. ワールドシステム論にもとづいたモダンツーリズム研究の枠組み

以上前節でみてきたように、20世紀中葉以降の空間論の再生が、ツーリズム研究、特にデスティネーション研究に大きな可能性を押し開くことになった。モダンツーリズムは、近代世界の空間的な構造のなかで、国境やそのほかの境界を横断してある空間から他の空間への移動であり、そのもっとも大きな世界を分割する枠組みは、世界経済にかかわるワールドシステムということになる。われわれのツーリズム研究もまた、この視点に立って構想することができる。

ワールドシステム論によれば世界経済の空間は、中心・辺境（半辺境）により構造化されている。この構造のなかでツーリズムという人びとの流れが生ずることになる。そしてツーリストは、多くの場合「中心」から発生し、それが向かうデスティネーションは半辺境・辺境、もしくは中心のいずれかということになる。もちろん、辺境から生じたツーリストによる中心へ、辺境へのツーリズムの可能性もありうるが、歴史的にみて多くはない。空間論にもとづくモダンツーリズムは次のような類型が考えられる。

第一類型：中心のツーリストの辺境・半辺境エリアへのツーリズム

35) ナッシュ、*「帝国主義の一形態としての観光活動」*、パーレン・スミス編著『観光・リゾート開発の人類学—ホスト&ゲスト論でみる地域文化の対応—』55ページ

36) 同上書、59ページ

37) 同上書、58ページ

38) 同上書、59-60ページ

第二類型：中心のツーリストの中心域内ツーリズム

第三類型：辺境のツーリストの中心もしくは辺境域内へのツーリズム

### 第一類型

ワールドシステムはヨーロッパに生まれた世界経済であり、その形成発展過程でモダンツーリズムが形成されたと考えられるが、もっとも顕著で最初のツーリズムは「グランドツアー」であると考えられる。グランドツアーは、17世紀イギリスの貴族や専門職の子弟が見分を広げるためにイタリアを目的地とした文化的なツアーであった。この時期イギリスやフランスなど西ヨーロッパがヨーロッパ世界経済の中心となっていたのであり、他方世界経済の発祥の地イタリアの経済的競争力は減速し半辺境地域に後退していた。すなわち、中核の豊かな人びとのなかから生まれたツーリストが、かつてヨーロッパ文化・経済の中心であった（当時は半辺境に後退していた）イタリアをデスティネーションとして成立したのがグランドツアーであった。

ヨーロッパ世界経済が名実ともに世界に拡大しワールドシステムとなった19世紀、イギリスはそのヘゲモニー国として世界各地に植民地を持つようになると、植民地をデスティネーションとするツーリズム、すなわち植民地ツーリズムと呼ぶべきツーリズムを発展させることになった。新たにワールドシステムに組み込まれた多くの植民地、植民都市に鉄道が建設され、ヨーロッパ式のホテルが建設され、ヨーロッパ人お気に入りのリゾート、ヒルステーションが建設されていった。アジア・アフリカ・ラテンアメリカなどの近代的ツーリズムの形成発展はこの文脈で考察されるだろう。また、日本のようなケースもまた興味深い研究テーマとなる。

以上のような中心から半辺境・辺境に向かうツーリズムが第一類型に含まれるだろう。

### 第二類型

19世紀ワールドシステムの中心はイギリスやフランスといった西欧地域にあり、特にイギリスは18世紀後期の産業革命と呼ばれる技術革新以降近代世界をリードする工業社会になっていた。工場労働者の大衆的なツーリズムが始まったのが19世紀中葉であるといわれている。鉄道網の発展、万国博覧会のような国際規模のイベントの開催、海浜レジャーの発展などにより大量の人びとによりツーリズムが形成されたのである。第一類型に属しているグランドツアーのツーリストが貴族など一部の階級であったのに対し、労働者大衆がこぞって出かけていくツーリズムが成立したのである。この点についてはアーリが論じた「ロマン主義的まなざし」と「集合的まなざし」という分類に明確に現れている。

19世紀レジャーの誕生から20世紀前半マスツーリズムへという文脈で論じられるし、フォーディズム型のシステムにおけるモダンツーリズムもまたこの類型に属するであろう。

### 第三類型

辺境のツーリストのツーリズムである。

三類型にもとづいたモダンツーリズムにおけるデスティネーション研究の可能性がある。別稿の課題としたい。

## 2章 ポストモダンツーリズム

### 1. ポストモダン

モダンツーリズム研究をワールドシステム論の視点から行うとすれば、ポストモダンツーリズム研究はいかなる視点に立つのが可能か、そして妥当かが次の課題となる。欧米においては、1970年代を境にしてポストモダンが始まるとされ、遅れて日本に、さらに世界各地に拡大した。ポストモダン、脱産業、脱近代といった多様な言葉で論じられてきた1970年代以降の議論に注目しなければならない。

ここでは、アーリが論じたポストモダン観光の出現の経済的背景について検討する。モダンからポストモダンへの移行は、欧米においては1970年ごろであると考えられる。それは、豊かさや科学、経済発展を追求したモダンがもたらした人間疎外や自然環境の破壊、公害などの諸問題にたいする反省と批判を契機としていたのではなかったか。だからこそ、同時期に近代の豊かさの象徴であった大量生産大量消費の生産と消費、生活スタイルを可能にしたフォーディズム型生産のポスト・フォーディズムへの転換、脱産業などの現象がいっせいに出現したのではないか。1960年代最後から70年代にかけて何が起こったのかみていくことにしよう。

リオタール、ボードリヤール、デリダなどのポストモダニズムの諸理論は一つの共通分母を持っている。すなわち、「啓蒙」への全般的な攻撃を有しており、したがってこの視座からの行動への呼びかけは、「啓蒙」こそが問題であり、ポストモダニズムがその解答である、とハートとネグリは論じている<sup>39)</sup>。「啓蒙」「近代性」への異議申し立ての目的は、白人的、男性的、ヨーロッパ的なものの優位性を維持することである。そして、2番目の伝統を攻撃しているのである。言い換えれば、ポストモダニズムの理論は、近代的主権の伝統に挑戦しているのである<sup>40)</sup>。

ネグリとハートはヨーロッパにおける労働者・学生運動を念頭におきながら、「1968年以降、私たちは新たな時代、新たな労働者階級の社会的、政治的構成の時代へと足を

39) Michael Hardt & Antonio Negri, 2000, *EMPIRE*, Harvard University Press = 2003年, 水嶋一憲他訳『〈帝国〉—グローバル化の世界秩序とマルチチュードの可能性』以文社, 186ページ

40) 同上書, 189ページ

踏み入れた<sup>41)</sup>」と論じている。すなわち、「労働の拒否」を訴えて、労働者の闘争と社会闘争という新たな時代の社会関係を先取りする提案をおこなったのである。労働の拒否は次のような形で表明された<sup>42)</sup>。

- ①大規模工業の規律や賃金体系に従属した労働への個人による拒否。
- ②テーラー主義的工場の抽象的労働とフォード主義的な社会関係のシステムに統制された欲求＝必要性の体制とが取り結ぶ関係に対する大衆的拒否。
- ③ケインジアン国家が社会的再生産の法則の全般的拒否。

この新たな時代の「拒否」に対して資本の再構築の過程には、次のような3つの応答によって特徴づけられた<sup>43)</sup>。

- ①個人的労働の拒否に対して、資本は工場にオートメーションを導入した。
- ②アソシエーション的な労働の共労的関係を切断する集団的拒否に対しては、資本は生産的社会関係のコンピュータ化を推進した。
- ③社会的な賃金規律の全般的拒否への対応として、資本は企業を特権化する貨幣のフローによって統制された消費の体制を導入した。

1960年代から70年代にかけての闘争を沈静化し、指令を再編成するという任務を成し遂げるために、資本には2つの道筋が開かれていた。

第一の道筋は、抑圧的な選択肢であり、根本的に保守的な作戦であった。社会的な移動と流動性を管理することによって達成された。この戦略の中心的な武器は、生産のオートメーション化とコンピュータ化を含むテクノロジーの抑圧的な活用であった<sup>44)</sup>。それと同時に模索された第2の道筋は、抑圧を目指すものではなくプロレタリアートの組み立てを変化させること、そして、それによって生じた新たな実践と形態を統合・支配・利用することを目指すものである。

このシフトを理解するために、1960年代アメリカにおける諸運動の出現とその理念を整理しておくのが有用である。1960年代のアメリカ合衆国では、やる気のないアフリカ系アメリカ人は、可能な限りの手立てを尽くして労働を拒否した。若者は、工場と社会のうんざりする繰り返しを拒否して移動性と柔軟性からなる生活スタイルを創出した。学生運動は、知識と知的労働に高い社会的価値を与えるよう求めた。フェミニストの運動は、「個人的な」関係の中に含まれている政治的関係を明らかにし、また家父長的規律を拒否して、伝統的に女性の仕事とみなされてきた事柄の社会的価値を増大させた。

41) Antonio Negri & Michael Hardt, 1994, *Labor of Dionysus: A Critique the State-Form*, Regent of the University of Minnesota = 1008年 長原豊他訳『ディオニソスの労働—国家形態批判』人文書院, 350ページ

42) 同上書, 350ページ

43) 同上書, 351ページ

44) Michael Hardt & Antonio Negri, 前掲書, 347ページ同上書,

これは、情動労働ないしは介護労働の高度な内容を含むものであり、社会的再生産に必要なさまざまなサービスを中心とするものであった。これらの運動の価値を示す指標、すなわち移動性、柔軟性、知識、コミュニケーション、協労、情動的なものが、今後数十年間の資本主義的生産の変革をいかなる仕方で規定するかを検討することになる<sup>45)</sup>。

こうしたヨーロッパおよびアメリカにおける諸運動が資本のあり方が模索されたのである。新しい世界のなかで、繁栄することのできる資本の配置は、労働力の非物質的、協調的、コミュニケーション的、そして情動的な新しい組み立てに適合し、またそれを支配することを可能なものに、限られるのである<sup>46)</sup>。こうして、ポストモダンあるいは情報化の過程は、工業からサービス業（第三次産業）への労働力移動によって示されてきた。これは支配的な資本主義国、とくにアメリカにおいて1970年代初期から起こってきた転換である。サービスとは、健康維持から教育、金融、運輸、娯楽、広告にいたるまで、広い活動範囲にわたっている。そして、それ以上に重要なのはこれらの職業を特徴づける中心的な役割は知識、情報、情動、コミュニケーションにおかれているということである。その意味で、ポスト工業化の経済を情報化の経済と呼んでいるのである<sup>47)</sup>。

1970年代以降、サービス経済型モデルに向かう傾向はアメリカ、英国、カナダが先導している。特に金融サービスが支配的である。第2のモデルは情報産業モデルであり、日本やドイツがその典型である<sup>48)</sup>。こうした支配的な諸国にのける脱産業、工業生産の衰退につれて工業生産は実質上従属国へと輸出された。こうした地理的な移行や配置換えを目にすると、支配諸国においては情動サービス経済が、最初の従属諸国において工業経済が、さらなる従属国においては農業経済が主流であるという新しいグローバルな組織化が起こっている<sup>49)</sup>。欧米先進諸国で脱工業、サービス産業化がすすむと同時に、東アジア諸国が工業国として急速な発展を遂げ、「アジアの4小竜」とか「4タイガー」、 「アジアNIEs (Newly Industrializing Economies (新興工業国))」などと呼ばれて注目された。日本と同様タイガー諸国も、その産業の多様化を図った。1963年から80年代半ばにかけて、韓国と台湾では化学、プラスチック、金属、機械、輸送設備といった重工業製品の生産高が向上した。同様の展開はシンガポールにおいてもみられた<sup>50)</sup>。

ところで、支配的な資本主義国、すなわち先進諸国の主要な産業となった非物質的の労

45) 同上書, 355-356ページ

46) 同上書, 358ページ

47) 同上書, 369ページ

48) 同上書, 370ページ

49) 同上書, 370ページ

50) Robin Cohen & Paul Kennedy, 2000, *Global Sociology*, Palgrave Publisher, =2003年, 山之内靖訳『グローバル・ソシオロジー I 格差と亀裂』平凡社, 222ページ

働とは、人間の接触や相互作用がもたらす情動にかかわる労働である。例えば、健康維持に関するサービスは主としてケア労働や情動にかかわる労働に依拠しており、娯楽産業も同様に情動を創り出したり、操作したりすることに焦点を合わせている。その労働は、安心や幸福感、満足、興奮、情熱といった感情であるという意味で非物質的な労働であるといえることができる。接触は娯楽産業におけるように現実的なものでも仮想的なものでもありうる<sup>51)</sup>。

このようなポストモダンの状況で、ツーリズム研究もまた見直されることになる。

## 2. 空間論の展開とデスティネーション研究の発展

この段階のツーリズムおよびデスティネーション研究は、ワールドシステム論にもとづいたものでは不十分である。工業生産から自由になった先進諸国は消費社会に移行し、半辺境、辺境エリアに工業生産基地は拡大し、ツーリズムによる人びとの移動の様相を大きく変化したからである。

空間論的展開と呼ばれるパラダイムシフト以降のツーリズム研究の構想が提案されなければならない。

ルフェーブルの空間生産論の主要な論点は、「社会的空間は社会的に生産される」というものである。それゆえ、「空間とは生産物」であるということになる。

ルフェーブルは、空間が生産過程と特徴について論じていく。空間の生産の過程において、物理的・自然的空間は遠ざけられる<sup>52)</sup>。それぞれの社会が、それ自身の空間を生産する。空間の生産の過程と生産物である空間とは不可分の二側面である。空間の生産において生産諸力および生産諸関係が決定的な役割りを果たす。「絶対空間」「抽象空間」、空間の矛盾、差異の空間などが論じられる。

### 空間生産と生産された空間

生産された空間は、思想と行動の手段であり、生産手段であるだけでなく、統治の、それゆえ支配と権力の手段でもある。空間を生み出した社会的、政治的（国家的）諸力は、この空間を完全に征服しようとするが、それはうまくいかない。社会的空間の特異性を浮き彫りにするには、心的空間、物理的空間を区別することが必要である。心的空間とは、哲学者や数学者によって定義されたものであり、物理的空間とは、実践的・感覚的な活動および自然の知覚によって定義された空間である<sup>53)</sup>。

「社会が空間を生産する」という命題の意味するところおよびその帰結には次のよう

51) Michael Hardt & Antonio Negri, 前掲書, 377ページ

52) Lefebure, Henri, 1974, *La Production de L'espace*, (=2000, 齊藤日出治訳『空間の生産』青木書店) <12>

53) 同上書, 66-67ページ

な4点が指摘される<sup>54)</sup>。

- (1) 物理的、自然的空間が遠ざけられる。すなわち、社会空間にあっては、自然は社会の生産諸力が働きかける原料に過ぎない状況になる<sup>55)</sup>。
- (2) それぞれの社会は、それ自身の空間を生産する。この議論から建ち現れる三種の概念とは、すなわち①空間の実践、②空間の表象、③表象の空間である。②空間の表象とは、生産諸関係、生産諸関係がかする秩序に結びつけられており、③表象の空間は、複合的な象徴体系において具体的に表現されるのである<sup>56)</sup>。
- (3) 研究関心の対象は、空間の中の事実から空間それ自体の生産へと移っていく。(空間の)生産過程と生産物(社会空間)は、たがいに不可分な二側面として現れる。この点を突き詰めるために、②の3つの概念を練り上げる<sup>57)</sup>。
  - ①空間の実践：社会の空間的实践は、社会空間を分泌する。新資本主義における空間的实践は、日常の現実と都市の現実とを、知覚された空間の内部において密接に結び付けている。近代の空間的实践を定義できるものとして、郊外の低所得者住宅の住民の日常生活、高速道路、航空輸送政策などがある。
  - ②空間の表象：つまり思考される空間であり、科学者、計画立案者、都市計画家、技術官僚さらに社会工学者、芸術家の空間である。社会における支配的な空間であり、言語による記号の体系、知的に練り上げられた記号の体系に向かう傾向を持っている。
  - ③表象の空間：映像や象徴の連合を通して直接に生きられる空間であり、「住民」や「ユーザー」の空間である。芸術家、作家、哲学者に支配され、受動的に経験された空間である。想像力はこの空間を変革し、領有しようとする。非言語的な象徴と記号の整合的な体系に向かう傾向にある。空間の生産者は、空間の表象にしたがって行動してきたが、これに対してユーザーたちは、表象の空間において彼らに押しつけられたものを受動的に経験したのである。
- (4) 空間の生産において、生産諸力および生産諸関係が決定的役割りを果たす。しかし、空間の歴史、現実としての空間生産の歴史、空間の形式と表象の歴史は、歴史的な事実の因果連鎖とは同一意視されない。空間の生産において、生産諸力(自然、労働と労働の編成、技術と認識)および生産諸関係が決定的な役割を果たす<sup>58)</sup>。

こうしたルフェーブルの空間生産の理論に啓発されたソジャはこれにもとづいた独自

54) 同上書、71-99ページ

55) 同上書、72-73ページ

56) 同上書、73,75ページ

57) 同上書、80-89ページ

58) 同上書、93ページ、95ページ

の「第三空間」論を展開することになった<sup>59)</sup>。われわれのポストモダンツーリズムにおけるデスティネーション研究に有意義なインパクトを与えることになった。

もう一つルフェーブルの議論でわれわれの課題に役立つであろう論点に注目しておこう。「抽象的空間」である。

### 抽象空間

「抽象空間」は「絶対空間」と対照的な空間である。絶対空間とは「宗教的、政治的な性格をおびた空間であり、血縁と地縁と言語のきずなによって生み出された。選ばれた場所（洞窟・山頂・水源・河川……）に位置づけられた自然の諸断片からなっている場所が、神聖化されることによって形成される空間である<sup>60)</sup>」。これに対して、「抽象空間」とは、建築家や芸術家、映像作家あるいは都市計画家たちが、創造し創出した空間であり、映像空間、アート空間、居住空間などである。人びとの居住空間は、上層階級の生活空間をモデルとして創出され、その映像やアート、建築物、アパート、住居は大衆の居住モデルとなっていく。人びとの居住空間は上層ブルジョアジーの生活空間をモデルにして創出されているが、そのモデルとなったのはかつての貴族の大邸宅やその周辺に広がる公共の通路や並木、広場などであった。建築家やアーティスト、デザイナーは貴族の邸宅やその環境をモデルにしてブルジョアジーの生活空間をデザインし、計画建設し、さらに大衆の居住空間を生産したのである<sup>61)</sup>。ゆえに建設された空間のファザードは注目に値するのである。このような抽象的空間は、計画化やアーティスト、建築からによって「思考された空間」であり、「空間の表象」ということになる。こうした空間では、①交換価値による使用価値の吸収、②交換可能性が顕著な特徴となり、巧妙に抑圧をおこなう<sup>62)</sup>。

こうして生産された思考された抽象的空間に人びとは、居住することになる。そしてこの空間が人びとの「生きられる空間」、言い換えれば人びとによって住まわれる空間となるのである。すなわち、権力者やブルジョアジーとその周辺の空間デザイナーが、人びとをしてこの空間に居住すること、この空間を活用することを強いるのである。「ユーザー」「居住者」は、「抽象空間」に居住させられることになるのである。

抽象空間には、レジャー空間もまた多数含まれることになった。アーリによるツーリストのまなざしが向かう空間はこうした計画者やアーティストたちによって創出されたのであった。まなざしもまたアーティストたちの創出したものであった。19世紀のイギリス

59) Soja, Edward, 1996, *Third Space*, Blackwell Publishing. (=2005, 加藤正洋訳『第三空間—ポストモダンの空間論敵展開』青土社)

60) 同上書, 95ページ

61) 同上書, V章12

62) 同上書, 458ページ

において最初のデスティネーションの一つであった湖水地方 (Lake District) はワーズワースなどの詩人たちが発見し、その意味や美しさを詩や絵画によって人びとに啓蒙したのであった<sup>63)</sup>。

最近日本で「パワースポット」ツアーが若者のあいだでブームになっている。かつては地域の神聖な空間であった無名の場所が、人びとにパワーを授けるという言説によってツアーデスティネーションに急速に登場することになったものである。いわば絶対空間の抽象空間化の現象の一つといえよう。かつては交換価値とは無関係な空間が、観光資源というような交換価値的な視点からツーリズムの俎上に上げられたとうことであろう。

#### アーリのまなざし論は空間論である

モダンツーリズムおよびポストモダンツーリズム研究に対するアーリの姿勢は、「ツーリストのまなざし (tourist gaze)」論であり、ツーリスト研究であると同時に、空間論的なデスティネーション理論でもある。アーリは、フーコーに触発されて『観光のまなざし』を書き、続いてルフェーブルに触発されてその研究を『場所を消費する』に結晶させた。

アーリのまなざし論に注目して、モダンツーリズムにおける空間論およびまなざしと空間の結合した理論であることについて整理しよう。アーリはその著『観光のまなざし』においてツーリズムの共通な特徴として次のような9項目を整理している<sup>64)</sup>。

- 一 観光は余暇活動であり、規則化され組織化された労働である。ツーリズムはある特定の地域で形成され、ある然るべき時代に発生した。
- 二 ツーリズムの関係性は、移動し滞在すること。空間的移動を含む。
- 三 住居、労働の場の外にある風景へと向かうこと。
- 四 まなざしを向けられる場所は、労働と明確に対比される。
- 五 ツーリズムのまなざしの大衆的性格に対処するために、これに応じられる社会化された新形態が発展してきた。
- 六 まなざしを向けるいろいろな場、選ばれる理由は、習慣とはまったく異なる強烈な楽しみの期待、非ツーリズム的活動によって作られ強化される。

63) William Wordsworth, *A Guide though the District of the Lakes in the North of England, with a Description of the scenery*, 1835, = 小田友弥訳『湖水地方案内』法政大学出版局, 2010年

64) J Urry, John, 1990, *The Tourist Gaze: Leisure and Travel in Contemporary Societies*, Sage (= 1995, 加太宏邦訳『観光のまなざし—現代社会におけるレジャーと旅行』法政大学出版局) 46ページ

- 七 ツーリストゲイズは、日常体験から区分される風景や街並みである。
- 八 ゲイズは記号を通して構築される。ツーリズムは記号の集積である。
- 九 ゲイズの対象は、複雑で変容していく階層性のなかにある。

ツーリストのまなざしは、空間と時間、そして階層構造をも射程に入れた理論ということができる。言い換えれば、まなざし論は空間論であり、まなざしの向かう先のデスティネーション空間を描き出す方法であるのだ。

### 3. ポストモダンツーリズムの諸相

ポストモダン、脱産業、ポストフォードイズムの時代、ツーリズムの新たな潮流はエコツアー、ヘリテージツアー、グリーンツーリズム、サステナブルツーリズムなどの語で語られるが、これらはモダン末期の疎外・公害への反省と新たに発見された自然や歴史文化の希少性、貴重性によって提案されたものであった。

かつて、交換価値としては無価値な絶対空間であると考えられていた自然空間、歴史遺産、農業空間、などが、新たな時代にあっては貴重で価値ある、かけがえのない環境であることを発見した人びとは、それを観光「資源」、不動産資源というような資源として認識するようになり、それらをツーリストのデスティネーション空間として活用するようになっていた。他方、貴重で保護、保存すべき諸空間の現状維持を図る目的のためにツーリズムが利用されたという側面もあろう。

ポストモダンツーリズムのデスティネーションは、多様化し、特定の地域ではなくあらゆる場所がそれぞれの特徴、表象をかかげて並び立つ競争の激化をもたらしていると考えられる。

### おわりに

空間論とともに、デスティネーション研究のあり方も大きく変化してきた。グローバル化が進む現代世界のツーリズム研究は、モダン時期以上に複雑なツーリズム移動を対象とせざるをえない。多様化するまなざしの向かう対象であるデスティネーションにかかわる研究は、ますます重要な課題となるし、デスティネーション空間の生産、その空間のユーザーであるツーリスト、ツーリズム産業に関わる人びと、さらに居住者に関わる問題など、多様な研究が今後の課題となると考えられる。